



次田 同著

詳註
伊勢物語

明治書院刊

著者略歴

明治十七年四月二十六日岡山市に生る。

明治四十二年東京大學文學部國文科卒業。

第七高等學校教授、佐賀高等學校教授、學習院教授、第一高等學校教授兼東京文理科大学講師等を経て、現在立正大學文學科教授。

〔主要著書〕

萬葉集新講、古事記新講、祝詞新講、國文學史新講（上卷下卷）日本文學通史、上代和歌（日本文學大系の一）、詳註伊勢物語、詳註方丈記發心集。

昭和二十七年九月五日印刷
昭和二十七年九月十日發行

詳註伊勢物語

定價金百參拾圓

著者 東京都中野區鷺宮一丁目三十八番地
次田潤

發行者 東京都千代田區神田錦町一丁目十六番地
株式會社 明治書院
専務取締役 文入宗義

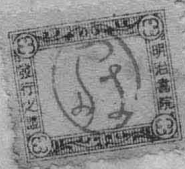
印刷者 東京都中央區銀座三丁目四番地
株式會社 文祥堂
代表者 佐藤保太郎

發行所

東京千代田區神田錦町一丁目
振替口座東京四九九一番 株式會社

明治書院

電話神田(25)〇三五四番
五七三〇番



一、本書の本文は、流布本を代する三條西家所藏の天福本（天福二年正月二十日藤原定家書寫の奥書のあるもの）によることにし、鈴木知太郎氏の手に成つた影印本（校註伊勢物語―武藏野書院藏版）を底本とし、校訂にあつては、池田龜鑑氏著「伊勢物語に就きての研究―校本篇」にあげてある諸傳本との異同を參酌して、底本の誤寫と思はれる文字を訂正し、假名遣の誤や、送假名、漢字の用法などの妥當でないものを改め、また讀みやすくするために、假名に適當な漢字をあて、漢字の不適當なものを假名にかへ、なほ句讀點、濁點を施しました。

一、本文の各段には便宜上番號をつけ、本文の目次にはその番號の下に、説話の内容を示すために、その段の歌文中の主要な語句を掲げておきました。

一、底本と系統を異にする諸本の中、平安末期に成立した皇太后宮越後本と小式部内侍本の斷章を保有してゐる傳二條爲氏筆本（大島本）塗籠本系統の高二位本の忠實な透寫本

といはれる不忍文庫舊藏本、神宮文庫藏本などと比較して、底本に無い歌文を参考文献欄に掲げ、語句の異同の著しいものは頭註に示しておきました。

一、参考文献欄には、なほ以下の諸文献を掲げました。(一)この物語の成立の基盤になつてゐる歌で、萬葉集・古今集・後撰集・拾遺集・新撰和歌・古今六帖等に出てゐるものの指示。(二)後人の補筆した註記と思はれる箇所への指示。(三)この物語の影響をうけて成つた文學作品及び美術作品の例。これらは伊勢物語の成立過程の考察や、この物語が文學史上に占めてゐる重要性の認識などに役立つものでありますから、有効に利用せられるやう希望します。

一、頭註欄には古語や和歌の解釋のほか、殿舎、服飾、官職、年中行事、地名、人物、動物、植物、調度などの解説を記し、また参考圖版を挿入しておきました。なほ第一頁に底本の初葉を掲げましたが、これは鑑賞するほどのものではありませんから、別に三箇所本文と關係のある歌文の古筆の一部分を掲げておきました。これは古典と名筆との調和美の鑑賞に資したい意圖によるのであります。

一、伊勢物語は外面に眞實を語つてゐるやうに装つて、實は作者の虚構が多分に存する作り物語であります。したがつて、これを鑑賞し批判する場合には、作者がどのやうな素材をとりあげ、いかなる作爲によつて創作したかを考察するとともに、物語に出てゐる實在人物の實歴や、當時の社會情勢や、重要事件などを一通り知つておくことが肝要であります。またこの物語を構成する箇々の説話は、互に微妙な關係で繋り合つて、全體が一篇のまとまつた作品になつてゐます。これらの事は極めて重要でありますから、解説中に特にくはしく述べておきました。

一、この物語の註釋書は中世から今日に至るまでに、極めて多く現はれてをり、また近代になつて多數の研究論文が發表されてゐます。これらは卷末に年代順に列記しておきました。

昭和二十七年六月末日

著 者

○殊に見習ふべきは古今、伊勢物語、後撰、拾遺、三十六人集の中、殊に上手の歌を心に懸くべし。(藤原定家—詠歌大概)

○古人曰く、假名書きの事、歌の序は古今を本とすべし。日記は大鏡のことぎまを習ひ、和歌のことばは伊勢物語ならびに後撰の歌のことばをまねぶ。物語は源氏に過ぎたるものなし。皆これらを思はえて書くべきなり。(鴨長明—無名抄)

○此比は萬葉はやりて侍り。まことに歌の根源にてあれば、よくよく御覽すべきにや。その外日本紀風土記は、國の名所のおこりなど書きたる物なれば、ふかく稽古あらん人は御覽すべきにこそ。又源氏物語、伊勢物語、古今以後代々の撰集、名所の名寄せなどやうのものを、常に見給ふべきにこそ。(二條良基—筑波問答)

○本歌にとる事、草子には源氏のことはいふに及ばず、ふるき物語もとるなり。住吉、正三位、竹取、伊勢物語をば皆歌をも言葉をもとるなり。(正徹—正徹物語)

○八雲の御抄にも稽古といへばとて、あながち天竺もろこしの文をつくせとにもあらず。ただ萬葉、古今集、伊勢物語などの内なるべし。ふるまひ艶に、詞のけだかきは源氏、狭衣なり。これらをすこしも窺はざらん歌人は無下の事と古人も申し侍り。(心敬—ささめこと)

本文目次

一	うひかうぶり……………	三
二	西の京なる女……………	六
三	むぐらの宿に寝もしなむ……………	六
四	大后の宮の西の對……………	八
五	築地のくづれより……………	一〇
六	鬼はや一口に食ひてけり……………	二
七	波の白く立つを見て……………	一四
八	浅間の嶽に立つ煙……………	一四
九	あづま下り……………	一六
一〇	みよし野の田の面の雁……………	三
一一	程は雲井になりぬとも……………	三
一二	武藏野は今日はな焼きそ……………	四

一三	武藏あぶみ……………	四
一四	栗原の姉葉の松……………	六
一五	なでふことなき人の妻に……………	六
一六	紀有常の妻別れ……………	六
一七	年ごろ訪れざりける人……………	一〇
一八	なま心ある女……………	三
一九	御達なりける人……………	三
二〇	かへでの紅葉を折りて……………	三
二一	思ふかひなき世……………	四
二二	千夜をひと夜に……………	三
二三	筒井つの井筒……………	六
二四	年の三年を待ちわびて……………	四

二五	逢はじともいはぬ女	四	四〇	さかしらする親	八
二六	袖に湊の騒ぐかな	五	四一	袍を張り破りて	六
二七	盟の影に見えけるを	四	四二	うしろめたき女	三
二八	色好みなりける女	四	四三	しでの田長	三
二九	春宮の女御の花の賀	四	四四	縣へ行く人に	五
三〇	逢ふことは玉の緒ばかり	四	四五	物病みて死ぬべき時に	六
三一	何の仇にか思ひけむ	四	四六	いとうるはしき友	六
三二	古のしづの緒環	五	四七	大幣の引く手あまた	九
三三	津の國菟原の郡の女	五	四八	人を待ちけるに	七
三四	つれなかりける人に	五	四九	寝よげに見ゆる若草	七
三五	心にもあらで絶えたる人	五	五〇	あだくらべ	五
三六	忘れぬるなめり	五	五一	人の前栽に菊を植ゑて	六
三七	我ならで下紐解くな	五	五二	飾粽をおこせければ	七
三八	君により思ひならひぬ	五	五三	逢ひがたき女	六
三九	螢のともす火に	五	五四	つれなかりける女	六

五五	女のえ得まじうなりて……………	九
五六	臥して思ひ起きて思ひ……………	九
五七	つれなき人の許に……………	九
五八	女ども田刈らむとて……………	八
五九	物いたく病みて……………	八
六〇	祇承の官人の妻……………	三
六一	染川、たはれ島……………	三
六二	古のにほひはいづら……………	四
六三	つくも髪的女……………	五
六四	吹く風にわが身をなさば……………	七
六五	身も滅びなむ……………	八
六六	難波の渦に行きて……………	九
六七	生駒の山を見れば……………	三
六八	住吉の濱を行く……………	三
六九	伊勢の國に狩の使に行きて……………	三

七〇	齋宮の童部に……………	七
七一	齋宮の好き事いふ女……………	七
七二	伊勢の國なる女……………	六
七三	月の桂の如き君……………	九
七四	女をいたう恨みて……………	八
七五	世に逢ふこと難き女……………	八
七六	大原や小塩の山……………	三
七七	安祥寺にての御法……………	四
七八	山科の禪師の親王……………	五
七九	千尋ある竹……………	七
八〇	藤の花を人に贈るとて……………	八
八一	塩竈にいつか來にけむ……………	九
八二	渚の院の櫻狩……………	二
八三	雪踏みわけて君を見むとは……………	六
八四	さらぬ別れのなくもがな……………	七

八五	正月に小野にまうでて……………	一九
八六	猶心ざし果さむと……………	二〇
八七	布引の瀧見に……………	二二
八八	おほかたは月をもめでじ……………	二五
八九	人知れず我戀ひ死なば……………	二五
九〇	あす物越しにても……………	二六
九一	月日の行くをさへ歎く男……………	二七
九二	棚なし小舟……………	二七
九三	あふなあふな思ひはすべし……………	二六
九四	繪書きにやれりけるを……………	二六
九五	彦星に戀はまさりぬ……………	二〇
九六	天の逆手をうちて……………	二〇
九七	堀河大臣の四十の賀に……………	二三
九八	梅の造枝に雉をつけて……………	二三
九九	右近の馬場のひをりの日……………	二四

一〇〇	忘れ草を忍ぶ草とやいふ……………	二六
一〇一	あやしき藤の花……………	二七
一〇二	あてなる女の尼になりて……………	二八
一〇三	心あやまりやしたりけむ……………	二九
一〇四	賀茂の祭見る尼……………	四〇
一〇五	白露は消なば消ななん……………	四一
一〇六	ちはやぶる神代も聞かず……………	四二
一〇七	藤原敏行……………	四三
一〇八	女人の心を恨みて……………	四四
一〇九	友達の人を失へるが許に……………	四四
一一〇	魂結びせよ……………	四五
一一一	下紐のしるし……………	四六
一一二	須磨のあまの塩焼く煙……………	四七
一一三	男やもめにてあて……………	四八
一一四	芹川の行幸にさぶらひて……………	四八

一一五	おきのゐ、みやこ島	一九
一一六	小島の濱ひさぎ	一五〇
一一七	住吉の御神現形して	一五一
一一八	絶えぬ心のうれしげもなし	一五三
一一九	形見こそ今は仇なれ	一五四
一二〇	筑摩の祭とくせなむ	一五四
一二一	鶯の梅の花笠	一五五
一二二	頼みし甲斐なき世	一五六
一二三	深草に住む女	一五六
一二四	我とひとしき人しなければ	一五八
一二五	つひに行く道	一五八
	伊勢物語解説	一六〇
一	歌物語の發生	一六〇
二	伊勢物語の成立過程	一六五
三	流布本の組織内容文體	一七〇

目次

四	傳本解説	一八一
五	研究略史	一九四
	研究参考文献	二〇一
年表		二〇五
系圖		二一〇
在原業平傳		二二二
和歌索引		二二五

圖版目次

三條西家所藏天福本第一葉……………二

狩衣……………三

しのぶ……………三

むらさき……………四

八重むぐら……………七

尾形光琳作八橋蒔繪硯箱……………一六

嵯峨本伊勢物語挿繪……………一八

ゆりかもめ(都鳥)……………一九

武藏鎧……………二五

乗馬婦人の旅姿……………二五

萱草(わすれぐさ)……………三五

井戸の生活風俗(扇面古寫經下繪)……………三八

振分髪(同右)……………三九

海松(みる)……………四四

盥と半挿……………四六

傳宗尊親王筆元曆萬葉集切……………五三

浮線綾丸の袍……………六一

ほととぎす……………六三

女子の正装……………六六

大幣(おほぬさ)……………六九

行成流名筆古今集切……………七一

粽の一例……………七七

われから……………八〇

陰陽師……………八九

續松(ついまつ)……………九五

傳寂蓮筆(右衛門切)……………一〇三

隨身……………一〇六

布引の瀧……………一二

わらうだ(圓座)……………一二三

高坏……………一二三

女車……………一三五

べにばな……………一四一

ひさぎ……………一五一

伊勢物語 (天福本)

要研

④

⑦

初

15

三句切
例
是
日

(3)

(21)

(26)

(83) ... (12)

(65)

(82) ... 1. 2. (平)

(83) ... 1

(84) (平)

(86)

(84) ?

(106) (平) 2句切

(124)

(一)元服すること。元服は男子の成年式であつて、皇子は十二から十五六歳までの間に、一般貴族の子弟は十七八頃までの間に行つた。この時童の髪を短く切つて髻を結び、冠をつけ、成人の服を著る。

(二)奈良市春日山の南麓一帯の野。

(三)領る縁しての意。春日の里が私有地といふ縁故がある。

(四)鷹狩。鷹を放つて野の鳥をとる狩。

(五)若くて美しい。上品できれいな。

(六)垣間見の意。物越しに覗いて見ること。

(七)どちらつかず。ここは土地柄に不似合な、又は不調和なこと。

(八)底本に「男の」とある。諸本によつて「の」を削る。

(九)もと狩や旅に著用したが後に平常服になり、地質も布から絹に變り、模様も華美になつた。狩衣の前は膝までだ

いゝれど、うぬがうありて
から乃京ありのいよふ志ふ
りて、うぬいよなりうの
いよふとありけり伊よをんか
えらうまかうとこのれとこ
かいまづてうぬをいよえすあり
さよふとふとあてありま
れんこ、ちうふいよわねこの

が、うしろは裾が長く垂れてゐる。ここはその裾を切りとつて歌を書きつけたのである。

(一)しのぶ草の模様を摺つた狩衣。模様を摺る工程を簡短にいへば、花鳥松竹遠山などの模様を彫つた型木に染汁を塗り、これに糊付をした絹を張りつけ、その上を摺つて模様をつける。

(二)春日野の若い紫草の根で摺つた狩衣の忍草の模様が、こんなに亂れてゐるやうに、(若く美しいあなた方を、ちらとお見かけしてからは)私の戀ひ忍ぶ心は限りなくみだれてゐます。春日野は女の住む所の名であると共に、紫草の産地でもある。若紫と忍草は狩衣の模様と關係があると共に、紫は美人の象徴であり、忍草は戀ひしのぶ意を兼ねてゐる。(摺衣の事は参考文獻参照)

(三)老付きての意。大人めいて。年に似合はずませた言ひ振りをすること。(追ひつき

一

むかし、男、うひかうぶりして、奈良の京春日の里に、しるよしして狩衣(四)にいにけり。その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男か

いまみてけり。おもほえずふるさとに、いとはし

たなくてありけれ

ば、ここちまどひ

にけり。男著たり

ける狩衣の裾を切

りて、歌を書きてやる。その男しのぶ摺の狩衣をなむ著たりける。

春日野の若紫のすり衣しのぶのみだれ限り知られず

となむ、おいづきていひやりける。ついでおもしろき事ともや思ひけ

ん、



狩衣



しのぶ

(一四) みちのくのしのぶもぢずり誰故にみだれそめにし我ならなくに

ての意ではない)
(三) その場合に應じた氣のきいた行ひを、趣のあることと思つたのであらう。

(四) 第二句までは「みだれ」の序。陸奥の國(岩代)の信夫といふ地名と「忍ぶ」と懸つてゐる。私の胸はみだれてゐますが、それはあなた以外の誰の故でもありません。

(五) 「心ばせ」と同じ。おもむき。

(六) 氣早い。氣轉をきかせること。

(七) 鄙びに對する語。なまめかしい行ひ。風雅なふるまひ。

(八) 戀しくばしたにを思へ紫の根ずりの衣色に出づなゆめ(古今集戀三)

(九) 装束圖式上卷に「深紫ハ一位ノ袍也(中略之ヲ染ムルニ、綾一疋ニ紫草三十斤酢二升灰二石薪三百六十斤。淺紫ハ二位三位著用ス。染ムル事ハ綾一疋ニ紫草五斤酢二升灰五斗薪六十斤」とある。



むらさき

(一五) といふ歌の心ばへなり。昔人はかくいちはやきみやびをなんしける。

○「春日野の」の歌は古今六帖第五「すり衣」の項に「みちのくの」の歌と共に出てゐる。次に「みちのく

の」の歌は元永本古今集戀四に「題しらず、河原左大臣」(源融)として出てゐる。但し流布本古今集では、第四句が「亂れむと思ふ」になつてゐる。○「ついでおもしろき事ともや思ひけん」以下の文は、古注に、この物語の作者の言葉であると言つてゐる。○「若紫のすり衣」及び「しのぶ摺り」について古來種々の説があつて、今もなほ明かに説明されてゐない。ここに私考を述べておく。紫草は二尺ばかりに生育し、夏季に白い小さな花が群つて咲く。その根の皮が紫の色を帯びてゐるので紫と名づけられた。古歌に「紫の根摺りの衣」と歌つてゐるやうに、紫の色はその根からとる。花の咲く前に根を掘りとり、よく乾燥させてから細かに叩いて、これを木の灰の灰汁に酢を混ぜた中に入れ、布袋で濾して熱を加へる。灰汁と酢と熱の加減で色に深淺の差を生ずるが、同じ工程を數十回くりかへさないと、目的の色にはならない。紫色は優美であるから、服色の制では最上位のものとなつてをり、文藝作品では美人の象徴に